第11回　ローマ帝国が衰退するとき　ー　アンティオキアの大震災

パンテオンの半球体天井は頂部から光が差し込む（ローマ1993年撮影）

ヒスパニア（現スペイン）出身のハドリアヌスが皇帝に推挙されたのは紀元117年だった。地中海を取り囲むように版図を拡大したローマ帝国だが、２世紀になると属州の出身者が皇帝になるほど民族の同化が進んでいた。言語は法律など公式文書がラテン語、文学や思想は主にギリシア語が用いられたという。そしてインフラ、建築技術もグローバル化する。M.ユルスナールが小説のなかで、「建設とは大地と共同作業を行うことである。それはひとつの風景の上に人間の刻印を押して、それによって風景を永久に修正してしまうことである」とハドリアヌスに語らせているが、ハドリアヌス帝は自ら設計図を描くほど建築家としての素養もあったらしい。コミック『テルマエ・ロマエ』（ヤマザキマリ作）でもハドリアヌスの建築好きはおなじみだ。ローマに行くと必ず案内されるパンテオン（万神殿）の丸天井を見上げれば、1900年前にハドリアヌス帝が建てたドームの美しさに感嘆する。しかもこの球体の屋根、円形プランは以後の西欧建築においてひとつの規範となり、ルネサンス期にも多くの神殿（教会）に取り入れられた。球体、円形はピタゴラスのいうように幾何学的に完全な形態であり、「平和」の象徴でもあるのだ。

ハドリアヌスが皇帝になる前、東方にある属州シリアの総督としてアンティオキア（現在はトルコ共和国のアンタキア）という町にいた。アンティオキアは当時ローマ帝国内屈指の大都市で、アレクサンドリア（エジプト）、エフェソス（トルコ）とならび交通・商業の拠点として繁栄していた。

アンティオキアが古代の大都市として歴史の記憶にとどめているのは、パウロによる初期キリスト教伝道の拠点になったからでもある。もとはローマ市民権をもつユダヤ人のパウロがキリスト教に帰依して、いわゆる十二使徒とは別にアンティオキアでキリスト教支持者を増やしていった。パウロの行跡は新約聖書の「使徒行伝」に描かれており、なかでも興味を引くのは紀元50年頃の第２回伝道旅行だ。アンティオキアから陸路マケドニア（現ギリシア）のピリピという町に入った。パウロは伝道中に住民の不興を買い牢に閉じ込められた。その晩、大地震が起きて牢の扉は開き囚人たちを縛っている鎖も解けてしまった。てっきりすべての囚人が逃げたものと思い込んでいた牢番が自決しようとしたところ、パウロが「早まったことをしなさるな。みんなここにいる」と牢番を諭し、これに感激した牢番が家族ともども主イエスを信じ、ヨーロッパで初めてのキリスト教信者になったという話だ。

当時のローマ帝国内では、ユダヤ教もキリスト教もその他さまざまな宗教に関して比較的寛容だった。公的な儀礼宗教としてギリシア・ローマ神話の神々を奉っていたものの、個人の内面には無関心だったようだ。しかし、日々の生活習慣（たとえば祝祭日や崇拝）を変えるように強要したり、自然災害が起これば これを秩序の崩壊ととらえ、その責任を異教徒に負わせ抹殺しようとする暴力的観念があった。これは古今を問わず人間の性かもしれないが、悲しいことに支配者ハドリアヌスもそのひとりだった。

紀元115年12月13日の早朝、アンティオキアで大地震が発生した。当時の皇帝はトラヤヌス、総督がハドリアヌスでいずれもアンティオキアでメソポタミア地方のパルティア王国との戦争に備えていた。皇帝滞在中のため、アンティオキアは仕事や娯楽のために過ごす兵士や役人たちでごった返していた。揺れは数日間、昼も夜もつづき、多数の建物倒壊、死者は数しれず多かった（一説では26万人）という。皇帝トラヤヌスも傷を負ったが一命をとりとめ、余震の間は円形闘技場でハドリアヌスとともに野天生活を送った。やがて住民たちは、アンティオキアにいるキリスト教徒たちが伝統的神々の礼拝をくつがえそうとしたから地震が起こったと騒ぎ出した。キリスト教徒というだけの理由で糾弾し、ハドリアヌス率いる当局は信徒の主だった人をローマにまで引き立てたうえ虐殺したのだ。大震災を自らの問題とせず、異教徒のせいにしたローマ社会はしだいに活力を失い、やがて北方から侵入する蛮族への抵抗力を失っていく。

ハドリアヌスが具現化した球と円からなる平和の建築空間、パンテオンはその頑丈さから以後の地震倒壊や蛮族の破壊を免れた。そして紀元７世紀には皮肉にもハドリアヌスにとって異教であったキリスト教の聖堂となったのである。

紀元117年のローマ帝国版図（https://en.wikipedia.org/wiki/User:Andrei_nacuより引用）

（参考図書）

G.ダウニー（小川英雄訳）「地中海都市の興亡-アンティオキア千年の歴史」（新潮社）1986年

モンテスキュー（井上幸治訳）「ローマ盛衰原因論」（中央公論社）2008年

M.ユルスナール（多田智満子訳）「ハドリアヌス帝の回想」（白水社）2008年

A.Todhunter “ In the Footsteps of the Apostles “ (National Geographic) Mar. 2012